それ故に、闘う艦娘は美しい

パイロット

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突発的に書き連ねた艦これ×ガンダムＷ。

お前もトレーズ派だろ？

トレーズ様ならばあの世界でどうやるのか気になるよな、わかるよ。

人の戦う姿勢そのものを愛し、人を愛した閣下は

兵器として生を受け、人の姿をとる艦娘に出会い何を考えるか。

「ことは全て、エレガントに。」

反響次第では続きます。

書き溜めはないので……。

残酷な描写・アンチヘイトは念のため付けておきます。

目　次

戦士の輝き ―― 1
想いは消えず ―― 7
それは光か ―― 12
人を守るモノ ―― 16
暁のその先 ―― 20
敗者の光 ―― 25

戦士の輝き

遠い未来、突如として深海より現れた深海棲艦は瞬く間に各国を襲った。人類はこれに抵抗するが、既存の兵器ではかすり傷一つ負わすことできず。

そこへ現れたのはかつて世界に存在した艦の名を名乗る艦娘であった。少女の姿をし、艤装と呼ばれる装備を身に纏い、水上を走る存在、深海棲艦を倒すための人類最後の希望。

彼女たちをサポートするための機関、海軍が形成され、鎮守府が各地に作られ早数年、ただひたすらに防戦を続けていたのだった。

朝日が照らす砂浜の波打ち際、その水面を走る艦娘が2人。

「飛龍、急いで！早くしないとまたご飯抜きだよ！」

「そうはいってもさぁ……あれ？」

短いスカートと橙の着物を着込む飛龍と呼ばれた少女は、まさにその砂浜に1人の男が打ち上げられてるのを発見し、指差す。

「ねぇ、蒼龍！あれ見てよ！」

「えぇ？……うわ、土左衛門さんかな。」

そこには、ぼろぼろではあるが気品のある服を着た人物が打ち上がっていた。飛龍と同じく短いスカートに緑の着物で、ツインテールに縛った髪が特徴的な蒼龍と呼ばれた少女はそれに近づき、容体を確認する。

「身体中アザだらけだけど、まだ生きてるっぽいよ。」

「え、じゃあ急がなきゃ！」

言うや否や、飛龍はその男を担ぎ上げ、蒼龍と2人で鎮守府への道を駆けていった。直線距離、その水上を。

ーーーーーーーーーーー

火花散らすコンソールボックスを見つめながら、想いを馳せる。

身体はもうまともに動きそうもない。

私の機体を貫いたその槍は、見事な一撃だった。

「見事だ……五飛。」

感嘆の言葉が口につく。

「五飛……我が永遠の友よ……。君たちと戦えたことを誇りに思う……。」
彼の怒る言葉が聞こえる。
しかし、私としては全力を出し負けた。
これ以上はない。
私の役目はここまでと言うことだ。
「ミリアルド……先に行っているぞ。」
もう1人の永遠の友よ。
逝くではなく、行く。
そうだ、これは終わりではなく……。
ーーーーーーーー
そこは白い天井。
決して上質とは言えないが清潔なシーツに、漂う薬品の匂い。
医務室のようだが、あまり高度な施設ではなさそうだ。
「……私は……生き恥を晒したか。」
目を覚ました彼は、まずは生き残ってしまったことを後悔した。
自身が生き残ってしまっては、あの戦争の終着が見えない。
このままでは良くないと判断し、ベッドから降りようとする。
「あーっ！目を覚ましてる！」
そこに飛び込んできたのは先程彼を運んだ飛龍。
「……どういうつもりだね？」
彼としては自身のその姿は世界中に知られており、トレーズ派でもなく、軍人とも見えぬ女性がわざわざ彼を助けるなどとは思えなかったのだ。
「どういうつもりって……貴方が打ち上げられてたから、助けたんです！……あっ、もしかして自殺とか？」
しかし、その返答は当たり前のような言葉だった。トレーズは驚くが、それを一切表には出さない。
「いや……事故にあったのだがね。どうやら神には嫌われているらしい。」
ひとまずは自らの正体がバレてないと考え、トレーズは偽名を名乗

ることにした。
「私はシュヴァリエ。良ければここがどこか教えていただきたい。」
「し、しばりえさん……。ここは日本で……ひ、ひとまず上のものに相談します！」
飛龍はまるで逃げるように医務室を出て行く。
「……日本と言ったか。」
そういえば彼女たちの着物も日本のものだったかと思いだす。トレーズにとって、日本とは地球の島国であり、ガンダムのパイロットの少年が日系だっただろうか、と想いを馳せる程度の場所だ。
彼らには恨まれているだろうなとすこし感慨深く感じるが、自分のやるべき事は終えたと考えを新たにする。後は彼らの物語だ。
そうこうしていると、またも医務室の扉が開く。
「失礼します……。」
入ってきたのはこれまた着物を着た黒髪の女性だった。彼女は自らを鳳翔と名乗った。
「しばりえさんは、艦娘をご存知ですか？」
「……いや……。」
トレーズは知らぬことを知らぬと言うことに恥を感じるようなタイプではないが、駆け引きを一切行わない突然の知らぬ単語に警戒心を覗かせる。
「私は日本のことはあまり良く知らなくてね。」
「そう……ですか。」
艦娘は日本のみの存在ではなく、この世界においては世界中ざまざまな場所に存在し、海を守っている。
鳳翔からすれば、トレーズは自らが知らぬことを吐露したと同然であった。
しかし、彼女は腹の探り合いをしにきたのではないのだ。
「しばりえさん、艦娘とはこの世界において深海棲艦から平和な海を守るための兵器、と言うことになっています。」
トレーズは眉の一本も動かさぬが、心の奥では驚きを大きくする。
（私の誤答をすぐに明かすとは。それに世界では、だと？私の知識に

はそのようなもの存在しないが……。）
しかし、混乱は一切出さない。
優美な笑みを携えて、彼は言葉を紡ぐ。
「突然すまないが……トレーズ・クシュリナーダ。もしくは……ガンダムという兵器。それらに心当たりはあるかね？」
トレーズはジョーカーを切った。
目の前の彼女が危害を加える気がないと確信めいたものを感じたと同時に、もしどこかに突き出されるのであればそれも運命と受け入れるつもりだったのだが、彼の思惑は的中した。
「……いえ、存じ上げませんね。」
「なるほど、ありがとう。」
地球に住んでいて、彼のことを知らないなどとあり得ない。彼自身にはそれだけの自負があったし、あの戦争はそれだけの規模だった。
それでも知らぬ存ぜぬというならば、なにか理由があると考えるのが自然だ。
（『トレーズ』ではなく、私を利用しようということか？それとも顔を知らない……？）
考えに耽るトレーズに対して鳳翔が続ける。
「……実は、この鎮守府には責任者、つまり提督がおりません。」
「お断りさせていただく。」
「え……？」
何の質問もしていない鳳翔が、先に回答を受け取り困惑してしまう。
「軍に所属するのは、表舞台に立てと言うことだ。それは彼らに対する礼儀を欠くことになる。それに、初対面の素性も分からぬ男に頼むようなことでもないと思うがどうかね？」
彼の青い瞳が鳳翔を見つめる。
鳳翔は一度下を向くが、再度意を決して話し出す。
「た、たしかにお願いしようとしました……。提督になっていただきたいと。ですがそれは……理由があるのです。初対面の方でも頼らざるを得ない理由が。」

そこで話を止めた鳳翔に対して、トレーズは表情で続きを促す。
「……艦娘は鎮守府に結び付けられた存在であるので、鎮守府が消えれば共に消えてしまうのです。着任してくださった提督は長い間、いらっしゃらないのです。」
「来ない？提督という立場の者が、かね？」
軍人が急に来なくなるなど、それは基地の放棄なのではないか、ともしともすれば彼女たちは捨てられたのではないかと危惧する。
「はい、よくあることだそうなのですが、提督になる条件は成人していることのみでして、鎮守府を作るだけ作ってあまりいらっしゃらずに失踪されるのだと……。我が鎮守府はかなり規模も小さく……このままでは消えてしまうことになります。」
「消えるとは？」
「鎮守府には、艦娘を保護する機能があります。所属している間は存在が消えることはありません。しかし、提督がいなくなる等、基地として機能しなくなる場合ここは消えてしまうのです。所属していた艦娘と共に。」
ふむ、と彼は手を顎に当てる。
「そのカンムスとやらが消えてしまうと、君たちはどうなるのかね？」
「私たちが、艦娘です。」
まるでそう聞かれるとわかっていたかのように、鳳翔はトレーズの言葉に被せて答える。
「……つまり君たちは生き残りを、謎の男にかけているわけだ。己の運命を享受する気にはならないのかね？」
「失礼を承知でお願いしております。」
トレーズは整理する。
おそらくここは自分の知っている地球ではないこと。
そして、おそらくこの世界には、モビルスーツは存在しないのであろうこと。
敗北し、世を去った命だ。
拾った彼女たちのため、使うのも運命というものだろうと。
そして、自らが兵器であると言い切った鳳翔の瞳に宿る生命の炎を

信じようと。
「……君の敵はなんだ？」
トレーズは鳳翔をまっすぐと見つめる。
彼女は怯むことなく応える。
「……深海棲艦……平穏な海を脅かす、人類の敵です。」
「なるほど。……どうやら君は兵器ではない。戦士だ。……戦士の輝きは戦場以外で失われて良いものではない。」
トレーズはベッドから立ち上がる。
ぼろぼろではあるが、気品のある、彼が着ていたマントを手にとる。
「会議室はあるかね？皆を集めてくれたまえ。」
鳳翔の顔が明るくなる。
「では！」
トレーズはマントを羽織り、前を見つめる。
行先はまだ見ぬ世界。
しかし、彼の行動に曇りなどなかった。
「現時点をもって、この私トレーズ・クシュリナーダが艦隊の指揮を取ろう。」
窓からの日差しが彼を照らす。
差し込む朝日が男の新たな生誕を祝っているかのようで。

想いは消えず

そこは会議室……ではあるが、まるで日本の教室のような部屋だった。
鳳翔が全体放送を行なって、数分が経った。
机や椅子が並んでおり、それらに数人の女性が腰掛けている。
女性たちは見た目の年齢はまばらだが、共通しているのは皆うら若き少女であるということ。
トレーズは黒板を背に教卓を望み立つ。
「……これは……生徒に対する教師のようだね。」
既にこの鎮守府には艦娘が在籍するだけとなっており、彼女たちだけで生活をしていると言うことだ。
（明らかに子供もいる……彼女たちも兵器だと言うのか……？）
まるで怯えるように自分を見つめる少女たちを見つめ、流石に驚きを隠せないトレーズ。
「トレーズさん、ご挨拶を……お願いします。」
「……あぁ。」
鳳翔に促され、彼は言葉を紡ぐ。
「皆、急なことに動揺が大きいだろうが、まずは聞いてほしい。私の名前はトレーズ・クシュリナーダ。この鎮守府の提督を務めることになった。」
彼の言葉をきっかけに、ざわついた室内に緊張が走る。
「し、司令官は……？」
頭部に不思議なユニットが浮いている銀髪の少女が立ち上がる。
「君、名は？」
質問に答えることなく、トレーズは名前を尋ねる。
「えっ、あ……私は吹雪型５番艦、叢雲よ……。」
「叢雲、君が求める答えを私は持ち合わせてはいない。その純粋な想いに答えることができないということは心苦しいがね。」

それを聞くや否や、叢雲は声を荒げる。
「なっ……何よそれ！ここはアイツの場所なのよ！それを……！」
「叢雲さん！……？」
叢雲を諭そうと名前を呼ぶ鳳翔の前に手を出し、静止させるトレーズ。
その落ち着き払った態度すら、彼女の逆鱗に触れてしまう。
「貴方のような素性もわからない人が急に現れて……！」
しかし、その激情を遮るように、トレーズの澄み渡った声が響く。
「まずは、君たちの想いも知らず、この場所を乗っ取るかのような発言をしてしまったことを詫びたい。だが、強い想いは大きな輝きを放ち、周りを見えなくさせてしまうこともある。」
トレーズは叢雲を見つめたままゆったりと喋る。
「私は、君たちの想いや提督くんの考えを推し量る事はできない。だが、この場所を守る協力はできる。」
トレーズは、叢雲の元にゆっくりと近づいてゆく。
「だからこそ、君たちの力を借りたい。戦場で輝く君たちの、最大限の手助けをさせてくれ。」
手を差し伸べるトレーズ。
怒りや悲しみがないまぜとなった感情で、立ち尽くす叢雲。
そこに横から手が伸びてくる。
「そういうことは初期艦の叢雲には決め辛いだろう。」
「お名前を聞いても？」
トレーズは自らの手を取った長身の女性に目を向ける。
「長門型1番艦、長門だ。よろしく頼むよ、トレーズ殿。」
「長門さんは……受け入れるの？」
叢雲はまるで絞り出すかのように長門に尋ねる。
「……どちらにせよ、今の時点で消えるわけにはいかない。この長門には、戦う理由がある。君たちはどうだ？飛龍、蒼龍よ。」
声をかけられ、後ろの方で2人で聞いていた飛龍と蒼龍が答える。
「さっき助けた人が急に……ってのはやっぱちょっと不安かも？」
「でも、蒼龍！服装的にも立場は結構ある人なのかもよ！」

むむと2人で話し合う。
それらの反応を横目に、トレーズは改めて叢雲に問いかける。
「今すぐ決める必要はない。だが、進む先を決めるのは君自身だ。」
（しかし、やはり……。）
踵を返し、教卓へと戻るトレーズ。鳳翔にのみ見えたその表情は、なにかを思い出し険しくなっているように見えた。
戻りながら、その表情を柔和な笑顔へと変え、また皆を見渡す。
「ひとまずは私に、この鎮守府の状況把握の時間をくれ。幸い緊急の作戦などはないようだ。もし、なにかあれば執務室を訪ねるようにお願いする。今必要なのは君たち自身の言葉だ。」
トレーズはそう言うと、鳳翔を従え会議室を出て行った。
「叢雲……大丈夫かい？」
金髪の少女が教室の端から叢雲に近づいてきた。
彼女は睦月型5番艦、皐月。
この鎮守府では彼女たちの同型艦がいないため、2人は同じ駆逐艦として仲良くしていたのだ。
「……大丈夫よ。少し1人で考えるわ……。」
しかし、叢雲はその言葉に顔を向ける事なく、ふらふらと会議室を出て行った。
「……叢雲……司令官……。」
もう来ないだろうと思っていた艦娘、もしかしたら戻るかもと思っていた艦娘、彼女たちの思いはさまざまで、だからこそ同じように受け入れられるわけではないのだ。

「あの場にいたもの、データは全て目を通した。」
鳳翔は耳を疑った。
執務室、いわゆる提督の部屋に彼を案内してからまだ1時間も経っていないのだ。
「それは……いくらなんでも……。」
「鳳翔型1番艦、軽空母。……諸説はあるが始まりの空母か。なるほ

ど、私の方が勉強になることが多そうだ。」
「!?」
「あまり自身の話はしたくないが、記憶力は良い方でね。」
鳳翔が淹れてくれた緑茶を美しい所作で飲む。
初めて飲む味に舌鼓を打ちながら、彼は話を続ける。
「鳳翔、当面は君に秘書を頼もう。私はこれから鎮守府内の施設を確認してこよう。」
「は、はい……。では、私が案内を?」
「いいや、君には引き継ぎなど、大本営への連絡を頼みたい。すこし、気になることもあるのでね。」
立ち上がり、そのまま扉まで歩いてゆくトレーズに、鳳翔は帽子を手渡す。
「提督の帽子です。」
しかし、彼はそれを拒否する。
「……いや……必要ないよ。」
鳳翔は優しく、しかし力強く拒否され、それ以上言いすがることはなかった。
「では、案内は誰に頼みますか?」
「そうだね、長門くんだったか。彼女が一番新しくここにきたのだろう?彼女に頼みたい。」
当時の最新のシステム、大型建造によって造られた彼女は、そのまま実戦に出る事なく放置されたようだ。だからこそ、戦いへの想いが強い。
「わかりました、お伝えしておきますね。」
「いや、自ら足を運んでこそだろう。こちらが頼む側なのだからね。それこそが彼女に対する礼儀だ。」
そう言いながら、彼は執務室を出て行こうとするが最後に鳳翔をに尋ねる。
「鳳翔、君は前の提督をどう思う?」
「どう……とは?」
「特別な感情があったか、という意味で聞きたい。」

「それでしたら特には……。」
「そうか……ありがとう。では失礼するよ。」
残された鳳翔は、提督交代用の資料作成に取り掛かることとなるが、苦手なコンピュータを使わなければいけないことに彼女はひとつ小さなため息をついた。

小さな鎮守府ではあるが、所属している艦娘の数は少ないため、彼女たちには寮に個室が与えられている。
「私が、か？」
トレーズが長門を訪ねると、彼女はすこし驚いたように反応した。
「私はまだこの鎮守府では出撃もした事ないのだが。」
「そういう意味では、私と君は似ている。」
トレーズは柔和な笑みを崩さず、手を差し伸べる。
「ここでは私も新兵だ。過去のビッグセブンの話をお聞かせ願えるのであれば、それほどありがたいこともない。」
トレーズとしては、この鎮守府の地図や施設の概要は既に頭に入れたのだ。
今必要なのは彼女たちの信頼。
「……そう言っていただけるなら、この長門、最大限協力させてもらおう。ただ少しだけ準備の時間が欲しい。」
「助かるよ。では、エントランスで待っているよ。」
彼が去ってゆく姿を見送りながら、長門はトレーズから歴戦の実力を感じた。
そして、部屋の中に戻り、震える。
「彼のような提督の元でなら……。」
かつては戦場で沈むことが許されなかった。ここにきてからも一度も戦場に出ることなく、消えてゆくはずだった新たな自身の手を足を見つめ、つぶやく。
「胸が熱いな……！」

それは光か

「待たせてすまない、提督。」
トレーズがエントランスで待ち始めて数分後、動きやすそうな露出の多い服装で長門が現れる。
「こちらこそ急を言ってすまないね。」
柔和な笑みを浮かべながら、長門と共に鎮守府内の見学に向かう。
歩きながら、長門は提督の優雅さに感服する。
まるで常に人に見られているのを意識しているかのような、そんな美しさ。
「なにか、気になることでも？」
「あ、あぁ、いや、提督は一体何者なんだろうとな。」
そんな何もかもを見通したような瞳で見つめられ、長門は戸惑う。
トレーズはにこりと笑い、答える。
「今の私は、何者でもないよ。」
長門はそれ以上は聞けず、すこしの申し訳なさを感じながらも、共に施設内を回ったのだった。

施設の確認や、書類の精査、現状の戦力の把握を終え、トレーズは執務室にて鳳翔の入れたお茶を嗜む。古ぼけた時計が、規則正しく秒針を刻む音だけが、その部屋に鳴り響く。
「日本のグリーンティー、奥の深い味わいだ。」
今現在、その鳳翔は晩の支度があるのだと席を外している。現在財政難でもあるこの鎮守府をやりくりするには鳳翔自らがキッチンに立つ必要があるらしい。
「食事をする兵器……か。私の感覚ではそれは人と呼ぶのだがね。」
かつて自らを武器の一つとして自爆も厭わない兵士たちがいた。彼らの行動やその想いの強さは、トレーズの心を熱く奮い立たせた。
（……彼女たちにもそれはある……だが。）
トレーズは再度お茶を飲む。

特に高いものでもないが、まだ慣れぬトレーズにとっては新鮮な茶葉の味だ。その味わいが消えぬうち、彼はとある資料を手に取った。
（彼女たちの信念には霧がかかっている。しかもそれは、本人ではなく誰かの意思で。）
そこには、本部から支給される高速修復材のことや、指輪のこと、そして、建造に使う資材についてのことが事細かに載せられていた。
「……純粋な願いは、戦いの中で洗練されてゆく。平和への祈りは、強大な力を持つとその心を悪にも染め上げてしまう。……いただけないな。」
小さく音を立てて、茶碗を茶托へ戻す。
（レディ・アン……君の力を借りることができればどれほど良いか……。）
かつての忠臣、レディ・アン。
彼女はトレーズの信頼する部下で、かなり有能な人物であった。また、その忠誠心は唯一無二のものだっただろう。
その忠誠心によって暴走してしまうことはあったものの、彼女は素晴らしい人物であるのだ。
（……今の私にできるのは、これらの使用を控えること……か。戦力の増強は図るべきなのだろうがね。）
どれだけ絶望的な状況でも、最後まで足掻く。
その姿や志に人としての成長、進化がある。
トレーズは立ち上がり、その意志を曲げることなく、足を工廠へと向けた。

先程長門と共に来た際も、その工廠は異質だった。
何かがいるわけでもないのに、さまざまな資材が移動し、変形し、組み立てられてゆく。
長門はまるで気にすることないどころか、そこに誰かがいるかのように声をかけていた。

だが、トレーズは動揺しない。事前にその存在を知っていたのもあるが、彼は元々取るに足らないことで驚いたりはしないのだ。
（妖精……と呼ばれる存在か。彼らの存在が、現在の人類に与える影響は大きい……。）
艦娘の建造、武装の作成に留まらず、艦娘が撃ち出す戦闘機には彼らが乗ると言うことだ。
さらには、家具などの作成も彼らに任せてると言うことで、トレーズはそれでは人の成長を促せないとのこと。
「こちらの声は聞こえていると言うのに彼らの言葉は聞こえぬのは、どうも歯切れが悪いね。」
言葉とは裏腹に、彼らのことをあまり気にせず奥の方まで歩いてゆく。
そこには桃色の髪をした少女がいた。
「あら？どうしたの提督？」
何か忘れ物？と、周りを見渡してくれるのは工作艦、明石。
この工廠は彼女と妖精さんのみで回しているらしく、かなり忙しそうだ。
「明石、君にひとつお願い事があってね。この奥の工廠を一区画お借りしたいのだよ。」
「奥を？何か作るなら任されちゃうよ？」
疑問に満ち溢れた顔をした明石に、微笑みで返す。
「これ以上君だけにまかせるわけにはいかない。それに、何かを作るのは得意分野でね。」
「何を作るつもりなんです？」
興味から、明石がそれを訪ねる。
「そうだね。君たちが人であるための光……といったところかな？」
「光……？」
トレーズはそれ以上は何も言わずに、工廠の奥へと消えていった。
明石は疑問だらけであったが、そもそもかなり忙しい彼女はそれ以上の詮索はせず作業に戻った。
共に働く妖精たちと話す。

「不思議な人だね、私たちが人だって。」

「このような作戦で出撃しろと仰るのですか!?」
次の日、会議室では叢雲がトレーズに噛み付いていた。
それもそのはず、作戦内容は随分と破天荒なものだったからだ。
トレーズは着任したて、本部から受ける任務も簡単な正面海域の哨戒程度のものだった。
にもかかわらず、その作戦には叢雲と皐月のみを当て、その他現在保有する戦力である、長門、鳳翔、蒼龍、飛龍を南西諸島防衛線に出撃させようと言うのだ。
「現在の長門さんの練度では鳳翔さんたち空母を守り切れるとは思いません。そもそも、正面海域だけでなく、南西諸島沖の警備実績がある鎮守府でしか、その防衛線には参戦できないのですよ。」
防衛線をこぼれ落ちた弱った深海棲艦にも負けるようでは、防衛戦線には参戦できない。
「その二つの問題に関しては既に解決させている。」
トレーズは立ち上がり、襟を正す。
「まずは参戦の許可だが、それは前提督の実績を引き継ぐと言う形で認めていただいた。正面海域の残敵はこちらが受け持つとの約束の上で、ね。」
横から鳳翔が、許可証を机に広げる。
それは紛れもなく本部からの防衛線参戦許可だった。
「そしてもう一つ、長門の練度についてだが。」
トレーズは許可証の上に設計図を置く。
「彼女には新たな艤装を開発中でね。」

人を守るモノ

「この艤装……名を【ルークス】と言う。」
「【ルークス】……これは……。」
長門が【ルークス】と呼ばれたそれに手を触れる。金属特有の冷たさが彼女の指を襲う。
「私は機械いじりが好きでね。」
誰がみても、まだ作りかけだとわかる。
なにせ、砲塔と見受けられるものがほとんど存在しておらず、戦艦の艤装特有の主砲も存在していないのだ。
「随分と軽装に見えるが、私たち戦艦の良さを失うような気が……。」
「【ルークス】は厳密には兵器ではない。君たちを導くものだよ。……君たちに、真の敵の姿を見せてくれるだろう。」
「真の敵?……いや、そんなことより兵器ではない……だと!?」
必死の形相の長門がトレーズに迫る。
「提督も、この長門を戦わせてはくれないのか!?」
「落ち着きたまえ。」
そんな彼女を目の前にしても、トレーズが慌てることはない。ゆっくりとした動作で手を後ろに組む。
「これが落ち着いていられるか!我々戦艦は、戦場で死ぬことこそが誉だぞ!それをこんな火力も防御力もないものを与えて……囮でもさせるつもりか!」
熱くなる長門。
今まさに首襟を掴んでしまいそうなほどトレーズに詰め寄る。
鳳翔は慌てて止めに入り、他の艦娘たちも近寄る。
「やめなさい、長門さん!この方は上官ですよ!軍人として恥ずかしくないような立ち振る舞いをしなさい!」
「し、しかし!」
焦った顔でふらりと離れる長門。
トレーズはそんな長門を真っ直ぐ見つめ、語り出す。
「私は……かつてエピオンというモビルスーツを作った。」

モビルスーツ。それはトレーズの過去いた世界では当たり前の存在であり、”Ｍａｎｉｐｕｌａｔｉｖｅ　Ｏｒｄｅｒ　Ｂｕｉｌｄ　ａｎｄ　Ｉｎｄｕｓｔｒｉａｌ　Ｌａｂｏｒｓ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　Ｓｕｉｔ”　の略で、「建設および工業労働用有腕式拡充型スーツ」である。それが軍事転用され、兵器として使われていたのである。

「……モビルスーツ……？」

動揺する艦娘たち。

蒼龍からぽろりと漏れた言葉にトレーズは答える。

「君達で言うところの艤装のようなものだ。軍事転用された一方的で圧倒的な兵器は悲しい戦争を産む。だからこそ、私はエピオンを作り、敗北者になりたいと考えた。……しかし、君たちは元々兵器だ、兵器とは心がなく目の前の敵を撃つだけの存在だ。ならば今の君たちはどうだろうか。」

カツン……と、トレーズの足音が響く。

それほどの静寂が、辺りに広がっている。

焦っていた長門も、不信感を抱く叢雲も、話半分に聞いていた蒼龍たちも、鳳翔も。

みんな、トレーズの言葉に耳を傾けている。

「……誰かのために戦える存在を、兵器などとは呼ばない。人を守るのは等しく人だよ。」

「なにを……わかったようなことっ……」

かなり弱々しい声だが、叢雲だけが言葉を紡ぐ。

「私たちは……兵器だから……だから……。」

「人を想ってはいけない……かね？」

トレーズが優しく言葉をかける。

ビクッと叢雲の身体が跳ねる。

「なんで……。」

「人の心の機微には、敏感な方でね。どれだけの期間かわからないが、共に命をかけたのだ。それくらいは誰だってありうる。今の私の目の前には自分の生まれを気にして本当の想いを曝け出すことに怯える一人の少女しか映っていないよ。」

「……でも、あの人は来なくなってしまって……。」
「それの理由も、私が気にしていることの一つだ。……一度でも『提督』という立場に着いたものが、そう簡単にいなくなるものだろうか、とね。」
周囲がまたもざわつく。
叢雲が目を見開き、すぐさまトレーズに詰め寄る。
「なにかっ……何か知っているの!?」
「いいや、何も知らない。しかし、知ることはできる。」
今度は長門の前に移動する。
「……【ルークス】には、とあるシステムが搭載されている。」
「システム……？」
艤装に手を置き、穏やかな顔で語り続ける。
「それは精神に干渉する。戦いの覚悟がなければ……戦場に立つことを許されなくなる。」
悲しみを携えた顔で、長門を見つめる。
それを横から鳳翔が遮る。
「そんなものを艦娘に使って大丈夫なのですか!?」
「彼女次第さ。」
「そんな……。」
長門がそんな鳳翔を止める。
「鳳翔、この長門なら大丈夫だ。」
その顔には先ほどまでの焦りや不安は残っておらず、やり遂げてみせるという感情だけを感じることができる。
「美しき戦士の瞳だ。……人間に必要なのは絶対的な勝利ではなく、戦う姿、その姿勢にある。」
また、全員がトレーズを見つめる。
彼は全ての眼差しを真っ直ぐと見つめ返し続ける。
「戦いにおける勝者は衰退という終止符を打たねばならず、若き息吹は敗者の中から培われる……だからこそ、敗者になることに意味があると考えていた、しかし。」
トレーズは一度、目を瞑るとすこしだけ、顔が緩んだように見える。

あの死を覚悟した直前、おそらくミリアルドはヒイロと戦っていたであろう。
地球の命運を懸けて。
「望まぬ戦争を、良しとすることに未来があるとは思えない。足掻こうともせず、望まぬ結末を迎えることは何の価値もない。」
彼らは最後まで足掻き抜いた。
その心が、その姿勢が、その魂こそが、トレーズが求めていた結末そのものなのだ。
「諸君、明朝より作戦開始だ。皆の無事を祈る。」
「はいっ！」
全員の目が輝いていた。
握りしめる音も響く、明日はこの鎮守府の初めての出撃になる。
トレーズの下、みんなの心は一つとなった。

暁のその先

夜明け前、出撃準備の為の金属音が辺りに響く。
艦娘の為の艤装の最終確認。
窓越しに耳すませ、トレーズは執務室にて時を待つ。
「心を掴むのがお得意なのですね。」
茶托が静かに鳳翔の手によって机に置かれる。
淹れたばかりの緑茶が、ふわりと湯気を漂わせる。
「良い香りだ。」
トレーズは片手で茶碗を掴み、少しだけ呑む。
「私からすると、この香りの方が何倍も心掴まれるよ。」
「誤魔化さないでください。」
トレーズが鳳翔を見ると、彼女の真っ直ぐな瞳が彼を貫く。
「一体……何をするつもりなんですか?それは私たちには言えないことなのですか?」
「……黎明の直前がもっとも暗く、闇を見つめた後の方が、光を強く感じることになる。……まさに今の時間だ。」
「なにを……。」
窓の外から少しずつ、日の出の光が差し込む。
その光が、トレーズを包んでゆく。
「しかし、暁の中で一筋の光が見えたのであれば、それを手繰り寄せるのも運命といったところではないかね。」
音もなく茶碗を机に置き、マントを羽織る。
「君も準備を始めたまえ。もう間も無くだ。」
「出撃……。」
鳳翔は、はっとして扉へ向かう。
トレーズはそれを片手で制止して微笑む。
「いいや……夜明けだよ。」
扉が開く。
「暁の水平線に勝利を刻んでいるばかりでは、臨めないものがあると

言うことだ。」

「……出撃するわ。」
「皐月、出るよ！」
　叢雲が、装備を整え皐月とともに出撃していく。
「本当に大丈夫なのか……？」
　彼女たちを不安そうに見送った長門が、ともに見送ったトレーズに目線を向ける。
「彼女たちが作戦を成功させれば、色々と変わってくる。……君たちの戦う意味も。」
「……わかった。」
　疑念は完全に解けることはないが、それでも信じようと長門は艤装の取り付けに戻る。
「それでは提督……全艦、準備が整い次第出撃します。」
「全員無事であることを祈ろう。」
「……はっ。」
　トレーズの言葉を理解したのかしないのか、長門は軽く鼻で笑った後、にこやかに出撃していった。
「戦艦長門……出撃するぞ！続け！」
　新たな長門の艤装はなんとか完成したようだ。
　元々の艤装に比べかなり動きやすくなっており、装甲も激減している。さらに攻撃装備も副砲程度のものしか見当たらず、艦を落とせるような見た目のものは存在していない。
　特徴的なものは、周囲に浮遊する複数のユニットと胸の中央に輝く緑色の光。
（一体どう言う装備なのだ……相手を倒せると言うのか……？）
　身につけるにあたって一切の説明はなかった。
　トレーズからただ一言
「目的を見失うな。」

とだけ。
（目的……？平和のために深海棲艦を討ち滅ぼすことでは……。）
「長門さん！偵察機を飛ばします……護衛をお願いしても……？」
「あ、あぁ、承知した！」
（護衛とは言っても……壁になるしかないか。）
トレーズの立てた作戦に、艦隊戦のセオリーなどと言うものは存在しない。
鳳翔に対して、四人が出来るだけ固まり、お互いを護衛し合うと良いと言っていた。
「ほとんどの火力を航空機に頼った今の編成ではそれも間違いではないでしょうが……。」
「でもすっごいやりづらいよね……。」
「やったことない編成だから、走るのも一苦労だよ。」
鳳翔、蒼龍、飛龍が話し合う中、その前を長門は無言で走る。
ユニットがなんなのか、なぜ装甲を減らしたのか、攻撃手段は一体なんなのか。
考えることしかないが、その思考を鳳翔の声が引き裂く。
「長門さん！前方2時の方向に艦隊です！航空戦を開始します！」
「……！」
前を臨む。
見えるのは水平線、その先に敵がいる。
（敵だ……深海棲艦は敵……。）
ほんとにそうだろうか？
奴らが攻め込んできたことがあっただろうか。
海に出た一般人が攻撃されたというのも喧伝でしか聞かない。
【ルークス】は厳密には兵器ではない。君たちを導くものだよ。……君たちに、真の敵の姿を見せてくれるだろう。」
（……何故だ。あの言葉が脳裏を過ぎる。）
迷いは目の前に危機となって迫ってきてしまう。
鳳翔が、焦ったように声を上げる。
「制空権は手に入れましたが……まさか……戦艦を確認しました！な

ぜこの海域に……！」
「……！」
今の艤装では倒せない。
そう判断した長門は前へと加速する。
決めるのは覚悟、進めるはその足。
「ひとまずは倒す必要はない！いざとなれば壁になる！全機、そのほかの艦に攻撃を仕掛けてくれ！」
「了解！」
ユニットがふわりふわりと彼女の前を飛び交う。
（精神干渉とはこのユニットのことだろうか……？攻撃ができるものなら良いのだが！）
「会敵！」
目視前に当然のように長距離射撃が飛んでくる。
装甲を少なくして、速度を上げた今であれば当たることはない。
まるで特攻のように、ただひたすら真っ直ぐ走る。
鳳翔たちの航空機の攻撃はなかなか響いているようで、敵からの航空機は飛んでは来ない。
「この長門が囮になれば良いのだろう！」
真っ直ぐ走る戦艦は、やはり良い的だ。
戦艦や軽巡の攻撃は全て長門に向いている。
（避けきれずとも……！）
そうしているうちに空母の３人が飛ばした航空機が致命的なダメージを与えることができるはずだ。
しかし
「……くっ！」
軽巡の主砲が、長門を捉える。
間も無く当たってしまう、その瞬間、ユニットたちが長門の前面に展開。
電磁フィールドを展開した。
「!?……なんだこの盾は……？」
展開したユニットは全ての主砲や副砲を断絶した。

それはかつてトレーズが最も嫌った、モビルドールに搭載されていた技術。
最強の盾、プラネイトディフェンサー。

敗者の光

「まったく……なんなのよアレ……。」
工廠にて明石が独言つ。
素材などは同じものを使っているはずなので、完全に未知の技術だろう。
それにしてもエネルギーや実弾を遮断するバリアを展開するなど、かつて協力してくれた霧の艦隊のクラインフィールドのようなものだろうか。
「詳しいことは全然教えてくれないしなぁ。」
トレーズと言ったか。
あの提督は秘密が多すぎる。
出自もわからない、年齢も……まぁわからない。
そんな人が未知の技術を用い、作戦もベター。
「予感がするわねえ、楽しくなる予感！」

着弾とともに消失していく弾。
展開された電気フィールドはそれらを完全に消し去ってしまった。
「なんだこの技術は……？」
長門は戸惑ってしまうが、すぐに前を向き直す。
システムや技術は全くわからないまま使うことに不安はあるが、今は戦場だ。
「攻撃には転じられないのか!?」
どうやら完全に守ることしかできない装備で、また出力的にも常に展開できるわけではないようだ。
「……っ、まぁいい。次弾装填までの時間があれば再展開はできる。」
「な、なるほど……安心できる装備ですね。」
「複数艦隊を相手にしなければ鉄壁だね、長門さん！」
無線で連絡を取り合う。

艦隊全艦がこの技術には戸惑っていたのだ。
「蒼龍、飛龍、ひとまず敵艦隊の撃退を……。」
「もう終わってるよ、鳳翔さん！」
敵艦隊は大破とはいかないが、全艦中破以上の壊滅状態。
一艦隊相手に時間をかけすぎてしまったが、何とかなったと言ったところか。
それでも引くことはないのが深海棲艦の恐ろしいところだが、これ以上相手をしても仕方ない。
「こちら長門。提督、聞こえるか。」
この一連の流れの間、一言も言葉を発しなかったトレーズに連絡をとる。
「……こちらトレーズ。あぁ、聞こえているよ。そのまま戦線を維持していてくれたまえ。」
「……このままでは夜戦に突入することになるぞ。」
戦艦や航空母艦のみの現在の艦隊では、夜間に戦闘を行うことはできない。
そのことを知らぬわけではないだろう。
「目的は達せられた。君たちが一人も失われることなく戦線維持することができればある意味勝利といっていいだろう。」
「それは……叢雲たちの方で……。」
彼女らの知りえぬ、提督の作戦が成功したと言うことか。
それらが成功すれば見えてくるものとはなんだ。
尋ねたいが、言葉が紡げない。
呂律が回らなくなってくる。
前が見えなくなってくる。
長門はそれらがそうなってることに気づかなかった。
それなのに音がクリアに聴こえてくる。
「君が勝者とならずに戻ることを祈ろう。」
それからトレーズからの通信は切れた。
それすらも長門は気づかない。
（勝者……とならず……？我々は勝たなくてはいけない……のでは

……勝つ……？勝つとは……？敵を倒す……敵？敵は？）
「長門さん！どうしました!?」
長門は急に立ち止まり、その場にうずくまる。
鳳翔、飛龍、蒼龍は長門を心配し減速はするものの、止まることはせず通信にて呼びかける。
そうこうしていると段々と日は沈んでゆく。
ここからは敵艦隊の時間だ。
「長門さん、止まらないで！まだ敵艦はいるんだよ！」
「一体何が!?」
（なんだ……何が見える？何が聴こえる……？爆発……光……？これは……あぁ、これは……あの光だ……人の生み出した狂気の光……。私の敵……長門の敵は……この光か……？ならば生み出すのは……ヒト……人間は……敵なのか？）
「敵……敵は倒さないと……。」
長門はゆらりと正面を見据える。
そこには必然的に前を行くことになってしまった鳳翔たちがいた。
拳を握りしめる。
その目はまるで、ここじゃない世界を見つめてるようで……。
（アレは敵だ。敵を倒して、全部倒せば、戦争を終わられられる。）
エンジンの起動音が響く。
後ろから接近している場合、いまのスピードなら空母にはすぐ追いつくだろう。
なにかに導かれるように、長門はまっすぐと前を見据えた。
【目的を見失うな】
「!?」
まるで脳内にトレーズの声が響いた気がした。
（目的……？私の目的は……。）
敵の殲滅か？戦争での勝利か？
いや、違う。
そう、違うのだ。
方法はそうかもしれない。

やらなければ倒されるのかもしれない。
そうではないはずだ。
かつて彼女に乗艦した人たち、彼女を造った人たち、皆がそう考えたはずだ。
（愛する人々を……守りたい。守るために……この力を使う。）
戦うためだけじゃない。
そうだ、今は人になったのだ。
人なら自分で決めて良いはずだ。
「何のための砲だ。何のための拳だ。……私はビッグセブン、長門級一番艦！長門だ！」
長門が正気を取り戻した瞬間、胸の緑色の光るユニットが、煌々と輝きを放つ。
「そうか……ルークス！共に守ろう！」
その瞬間、長門の目にはまるで敵艦からの全ての攻撃のルートが見えていた。
「敵艦の魚雷が来ます！」
夜間の魚雷は察知もしにくい。
もう間も無く着弾してしまう。
「ルークス展開！」
水中に飛び込むユニットたち。
その電気フィールドは、魚雷を誘爆させていく。
「敵艦が諦めるまで、こちらは完全に守りきってやろう。それが今の最大の目的だ！」
「さっすが、長門さぁん！」
「助かるぅ！」
長門の後ろに回り込み、ハイタッチをする飛龍、蒼龍。
それらを見ながらも考え事をする鳳翔。
「……まるでわかっていたように……やはりトレーズ様には何かある……？」
そうして、何度かの波を越え、勝利することはなかったが、
彼女たちは無傷で帰投することができたのだった。

その半日前。
トレーズは二人に通信を行なっていた。
「さて、叢雲、皐月。君たちには、正面海域に出現する深海棲艦を捕縛してもらいたい。……撃沈したように見せかけて、だ。」
「……捕縛？」